

## 「器械運動の楽しさと求められる学習指導」

渡辺敏明（信州大学）



器械運動は、マット・跳び箱・鉄棒・平均台などを用いて技（運動）を学習する学校体育の領域です。その学習の中心にあるのは、できない技や新しい技に取り組んで動きかたのコツをつかむ活動であり、仲間と学び合う中で「できる喜びを味わう」ところに児童や生徒にとっての楽しさと、教育的意義があるのです。

いまの児童や生徒は、体を動かして遊ぶ経験が少なくなったことで、本来なら運動遊びから培われる動きかたや運動感覚の発達が十分といえない状況が生まれています。そのため、技能面をみると、高学年になっても逆立ちができなかったり、跳び箱が跳べなかったり、マットでスムーズに回れないなど、自分の思うように体を動かさないことで、器械運動の授業を楽しめないことが多くなっているのです。

また教師の側においても、小学校はもちろん、中学校・高等学校の選択制を取り入れた器械運動の授業において、必ずしも児童や生徒の実態に十分対応しているとはいえないようです。特に、近年における学習指導の場面では、教師が児童や生徒の実態に応じたスモールステップの教材（下位教材）についての知識や示範力を持ち合わせていないことが多く見受けられます。そのため、器械運動の授業では学習指導のあり方の工夫と改善が求められてきているのです。

こうした実態をふまえると、児童や生徒が将来にわたっていろいろな運動を楽しむためにも、技が「できる」ことを支える基礎的感覚や基本的な技能を確実に身に付けさせながら学習指導を展開していくことが必要となるのです。ご存知のように運動を「できる」ようにする学習では、めあて（目標）とする運動に「類似の動きの感じをもつ運動」を選び出して経験させることで、学習にむけた感覚づくりや動きづくりだけでなく、児童や生徒の動きの可能性を大きく広げることができます。器械運動の教材づくりにおいては、こうした意味のある学習内容をもたせることが大切になるのです。もちろん実際の指導場面では、教師からみるとどんなに意義のある運動（感覚づくり・動きづくり）でも、児童や生徒が気に入らなければ取り組んでくれませんから、まずは児童や生徒を「やってみたい」という気持ちにさせること、つまり取り組もうとする運動に「なじみをもたせる」ための学習指導が重要になるのです。

生涯にわたって運動に親しみ、豊かなスポーツライフを送るには、どうしても小学校の体育が入り口（基盤）とならざるをえません。さらに学校体育では、児童や生徒の資質・能力を確実に育てるために、それぞれの学年の発達段階に合った基礎的感覚や基本的な技能を身に付ける学習から始める教材づくりが求められるのです。児童や生徒にとって、運動ができるようになることは大きな喜びであり、体育独自の楽しさといえます。

そのため器械運動の授業づくりでは、技（運動）ができる学習を中心にして、友達と教え合い、励まし合い、見せ合う楽しさを味わわせながら、児童や生徒同士の学び合いを深めていくことで、より一層、価値のある体育授業にしていくことが期待されているのです。